



ファッションの ちょっと・ウンチク

ボタンの色々-1

衣類には、本体である生地部分の他に、ボタンやビーズ、ラメ、ファスナー、トリミングなど色々なアクセサリや部材が使われています。特にボタンについては、ほとんどすべての衣類に使用されています。一口にボタンといっても多様な種類の素材が使われています。

●ABS樹脂ボタン



ABS樹脂ボタンは、金属メッキしやすいことから、メッキボタンとして幅広く使われています。塩素系漂白剤や汗などによって錆びることがあります。裏を見ると加工の後の直線が見えるものもあります。

●ユリア樹脂ボタン



水牛の角のような素材感で、紳士スーツのボタンとして良く使われています。重厚なイメージの年輪状の柄を創り出すことができます。

●ナイロンボタン



樹脂を金型に流し入れてつくられることから、布目や皮革調、柄や文字をプリントしたり、箔押し加工したり、多彩な表現が可能です。弾力性があり、衝撃で割れることはほとんどありません。染色の後処理が不完全の場合、色落ちすることがあります。また、熱に弱いのでアイロンが直に当たると溶けたり変形したりする恐れがあります。

絵画の中の洗濯風景

屋上で洗濯物を干す着物姿の女



ジョン・スローン(1912年)

この油絵は、アメリカで画家、イラストレーターとして活躍したジョン・フレンチ・スローン (John French Sloan, 1871年8月2日 - 1951年9月7日) の作品です。

スローンはニューヨークを拠点として、都会の人々の生活風景を題材に描き、アメリカン・リアリズム派に位置付けられています。この作品もニューヨークのアパートメント屋上の光景でしょう。女性は着物を着ていて、口に洗濯ばさみをくわえています。現代のような金属ばねによるものが普及したのは19～20世紀初頭ということです。しかしこの絵をよく見ると、先端が二股に分かれた従来の木製のもののようです。



HomeDry News

ホームドライニュース No.123



●絵画の中の洗濯風景:

屋上で洗濯物を干す女

●ファッションのちょっと・ウンチク: ボタンの色々-1

●繊維と服飾の物語:

顔料と染料ってどう違うのでしょうか?

●なるほど納得! 衣生活の知恵:

綿麻製品の保管中はカビにご用心!!

繊維と服飾の物語



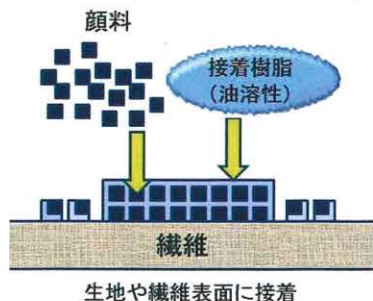
顔料と染料って どう違うのでしょうか？

例えば、「この油絵に使われていた顔料は…」とか「この壁画の青色には、貴重なラピスラズリの顔料が使われています」といった解説を聞いたことはありませんか？また一方で、「この着物は赤い染料で染められています」というように、着色の材料に「顔料（がんにょう）」と「染料」という言葉が使い分けられています。

衣類の着色にも「顔料」と「染料」が使われているのです。

日本産業規格（JIS）という国が定めている定義で顔料とは「水に不溶で、繊維に対して親和性のない有色の微粒子。これを繊維に適用するにはバインダーといわれる接着剤が必要。」（用語番号7014）と記されています。

顔料での着色をわかりやすく言えば、砂粒のように水に溶けない微粒子を接着剤に貼り付けるということになります。前述で「ラピスラズリ」という例を挙げましたが、ラピスラズリとは青い鉱石の一種です。顔料で着色された布の色は、生地の上に貼り付けられた鉱石などの微粒子の色ですから、綿や麻など繊維本来の色は覆い隠されていることになります。



顔料を使った代表的な布加工として顔料プリントが

あげられます。布上に顔料の粒子を、合成樹脂接着剤で表面に付着させてデザインを表現します。シャープで色鮮やかな仕上がりが特徴です。



顔料プリントの生地の例

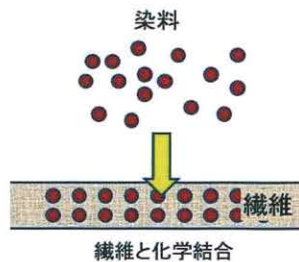
顔料プリントされた布を光に透かして見ると、プリントされた柄は不透明で黒っぽい影になります。またプリントされた部分の感触は多少硬い感じがします。

また、顔料プリント製品は次のようなトラブルが起こりやすいので注意しましょう。①剥がれやすい ②ひび割れる ③ドライクリーニングするとべたつくようになる ④摩擦で他の衣類などに色が移りやすい



剥がれてしまった顔料プリント

一方で、染料のJIS規格による定義は「水などの媒体に溶解又は分散し、繊維などに親和性がある吸着され、ほぼ満足できる堅ろう性をもつ色材。」とされています。いわゆる「染める」という言葉は、染料による染色に使われることになります。染料は、繊維の分子と化学的に結合することによって繊維と一体化して、染料の色と合成されることになります。ただし、最近ではナノ顔料という超微粒子による「顔料染め」という技術があり、染料による染色のように見えますが接着樹脂が劣化すると色落ちしやすくなります。



綿・麻製品の保管中は
カビにご用心!!

綿や麻などの植物繊維には、カビが発生しやすいものです。

汗の成分には、水分の他には塩分が最も多く含まれていますが、これは湿気を吸い寄せる性質があるため、衣類が常に湿っぽい状態になりやすく、カビが発生する原因になります。

また、植物繊維に含まれるセルロースという成分が、カビを繁殖させる養分になるのですが、汗に含まれるタンパク質や皮脂汚れがあるとより一層カビが発生しやすくなってしまいます。



また、保管中の冬の間、石油やガスなどのストーブが大量の蒸気を発生させるため、クローゼットの中が結露しやすくなりますので、除湿剤などによる湿気対策が必要です。

カビは、特殊な酵素を出して繊維を分解するので破れやすくなります。また、染料を分解して脱色したり、黒や黄色などの色素がとれにくいシミになったりするのです。